



日本イェイツ協会

第45回大会 プログラム

2009

9月26日(土) ~ 9月27日(日)

会場

東北大学文学部第二講義室

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内27-1

川内南キャンパス

TEL 022-717-7800

仙台駅からのアクセス

仙台市営バス

仙台駅前のりば	行き先	下車停留所 / 所要時間・運賃
9番のりば	宮教大・青葉台行 青葉通経由動物公園循環	東北大川内キャンパス下車 約 15 分 180 円

日本イェイツ協会事務局

〒350-0295 埼玉県坂戸市けやき台1-1
城西大学語学教育センター 小堀研究室内
TEL 049-271-7617 FAX 049-271-7983

9月26日(土) 于 文学部第二講義室

9:30~10:30 受付

10:30~11:00 挨拶
日本イエイツ協会会長 松村 賢一 氏
東北大学大学院文学研究科
英文学専修 主任教授 大河内 昌 氏
アイルランド大使 Brendan Scannell 氏
司会 小堀 隆司 氏

11:00~12:00 講演
日本イエイツ協会の歴史とヴィジョン 佐野 哲郎 氏
司会 真鍋 晶子 氏
12:00~13:00 昼食
総会 司会 笹尾 純治 氏

13:00~14:30 研究発表
イエイツ詩における「発話者を特定するリフレイン」
西谷茉莉子 氏
風の詩学：解きなおす螺旋 石川 隆士 氏
『幻想録』とイエイツの南イタリア巡歴
萩原 真一 氏
司会 伊達 直之 氏

14:30~17:30 シンポジウム
「初期のイエイツー形成期の詩人をめぐって」
司会・構成 松田 誠思 氏
長谷川弘基 氏
奥田 良二 氏
星野恵理子 氏

18:00~20:00 懇親会(会場 文系厚生施設) 司会 岩田 美喜 氏

9月27日(日) 于 文学部第二講義室

10:30~12:00 研究発表
BlakeとNietzscheをつなぐもの：YeatsのJacob Boehme 受容について
伊東 裕起 氏
「土掘りとしての詩」再考 河田 優子 氏
The Dreaming of the Bones の表象構造について 佐藤 容子 氏
司会 荒木 映子 氏

12:00~13:00 昼食
13:00~16:00 ワークショップ
「The Seeker」を中心に—イエイツ初期詩劇に見る萌芽と可能性
司会・構成 伊達 恵理 氏
小菅 奎申 氏
虎岩 正純 氏
16:00 閉会の辞 羽矢 謙一 氏

日本イエイツ協会

第45回大会

要旨

9月26日（土） 研究発表

●イエイツ詩における「発話者を特定するリフレイン」
西谷茉莉子

*The Identity of Yeats*において Richard Ellmann が指摘するとおり、イエイツのリフレインの技巧は、晩年の詩集である *New Poems* と *Last Poems*において、最も熟練したものとなる。しかし、彼のリフレインの技巧は、晩年になってから急速に発展したというよりも、生涯を通して断続的に発展していったと考えるのが妥当であるように思える。晩年の成果は、中期における実験的な使い方が実を結んだものと言えるだろう。そのような発展性の一側面を捉えることはできないだろうか。

本発表では、イエイツの中期から後期にかけての詩作品における「発話者を特定するリフレイン」を考察することを目的とする。(本発表では、“said Crazy Jane”のように、独白または会話をする発話者について解説する役目を果たすリフレインを「発話者を特定するリフレイン」と定義する。) Colin Meir によれば、このような表現はアングロ・スコットのバラッドに特徴的なものであるという。イエイツは、このバラッドの伝統的な表現を独自のものとして活用していく。

「発話者を特定するリフレイン」が使われているイエイツの詩作品は、私の知る限り、“Beggar to Beggar Cried”、“The Rose Tree”、“Solomon to Sheba”、“Three Things”、“Crazy Jane on the Day of Judgment”、“The Old Stone Cross”的6篇である。時間の都合上、6篇全てを詳しく論じるのは難しうが、リフレインの位置や文体上の工夫に着目しながら、これらの詩を比較検討したい。

●風の詩学：解きなおす螺旋
石川隆士

イエイツにとって螺旋は彼の神秘主義的思想の核となる修辞である。彼の作品において螺旋は様々な形で表現されるが、本論においては風に焦点をあてたい。

“The Second Coming” や “Sailing to Byzantium” に見られるように、螺旋は空間における動的推移の軌跡として表現されることが多く、その原理の偏在性を暗示している。そのとおり、星雲というマクロコスモスから DNA というミクロコスモスまで、あらゆる生命活動の中に螺旋は見出される。それは生命原理が自らの中に見出した修辞といつてもよい。

*A Vision*において示されたように Yeats の螺旋の修辞の特徴は、その逆転して連結させられた二重構造にある。つまり、あるものが構築されていくと同時に解体されてもいい。そこでは “dreaming back” の概念とまったく同様に、相反する方向性が内的循環を達成しているのだ。結果としてその修辞は、例えは老いが成熟であるといったような森羅万象の両義的な循環を含意することとなり、見かけ上は単なる物理的運動に過ぎないものに生命原理としての深みを与えることになる。

こうしたイエイツの螺旋の深みは、ウィンダム・ルイス、エズラ・パウンドを中心に、T. S. エリオットも関わり 1910 年代半ばに活動した Vorticism とは一線を画す。その運動はその機關紙 *Blast* が示すように明らかに解体の志向性しか持たなかつた。もちろん、その両義性の一側面として、イエイツの螺旋が解体の志向性を持つことは間違いない。特にそれは、吹きすさぶ風の中に表現されることが多い。しかし、それは相反する構築への志向性を内包していなければならない。本論では、“Nineteen Hundred and Nineteen” と “Meditations in Time of Civil War” を中心に、風に込められた螺旋の両義性を考察する。

●『幻想録』とイエイツの南イタリア巡歴

萩原眞一

イエイツ夫妻は 1925 年 1 月から 2 月にかけて、約 6 週間、シチリア島を皮切りに、ナポリとローマを巡歴した。シチリア島周遊ではパウンド夫妻も一部同行していた。なぜ詩人は巡歴の目的地として南イタリアを選んだのであろうか。それは 1925 年版『幻想録』を執筆する上で同地を訪問する必要性を感じていたからだと思われる。確かに、第 3 篇「鳩か白鳥か」の末尾には「1925 年 2 月、カブリ島にて脱稿」、第 4 篇「ブルートーンの門」の第 2 章の末尾には「1925 年 1 月、シラクサにて脱稿」と付記されていることから推察されるように、詩人は巡歴中、『幻想録』の原稿を携えており、特に「鳩か白鳥か」で言及されるビザンチン様式のモザイク壁画を、パレルモやローマの寺院で実際に見学する計画を持っていたと考えられるのだ。とすると、南イタリア巡歴は単なる物見遊山の観光ではなく、『幻想録』完成に向けての「調査旅行 study tour」の意味合いを色濃く帯びたものであつたと推定される。しかし、このように『幻想録』成立に密接に関わる巡歴であるにもかかわらず、エルマンやジェファーズ、そして最近ではフォスターなどの著名な研究者の評伝を繕いてみても、事実を簡潔に列挙するだけで、それらが巡歴の意義に関して考察のメスを十分に入れているとは必ずしもいえない。そんな中、管見の限り唯一の例外は R. E. マーフィーの研究である。彼は、イエイツが巡歴中に収集し娘アンが保存していた 80 点にのぼる写真・複製画・絵葉書などを詳細に分析した結果、詩人が明確な目的をもって旅程を組んでいたことを明らかにした。主な目的は 2 つある。すなわち、①パレルモやパレルモ近郊のモンレアーレなどのシチリア・ロマネスク様式のモザイク装飾およびローマの初期キリスト教寺院のモザイク装飾の重点的な鑑賞、②プラトンも訪問したマグナ・グラエキア（大ギリシャ）の都市シラクサ近郊の洞窟墓地およびミトラ教の秘儀が行われたカブリ島の洞窟の探訪である。そこで本発表では、マーフィーの研究に依拠しながら、これまでどちらかといえば等閑視されてきた 1925 年版『幻想録』とイエイツの南イタリア巡歴との密接な関係を検証してみたい。

9月26日（土） シンポジウム

「初期のイエイツー形成期の詩人をめぐって」

司会・構成：松田誠思

発題者：長谷川弘基 奥田良二 星野恵里子

●はじめに

松田誠思

「初期のイエイツ」と言えば、ふつう詩に関しては、*The Wanderings of Oisin and Other Poems* (1889)、*The Rose* (1895)、*The Wind Among the Reeds* (1899) などの詩集と、そこに見られる特徴的な詩風を指す。しかし、中期から後期へと詩風が著しく変化する彼の詩的生涯の骨格を的確にとらえるためには、詩人として出発する以前にまで遡って、イエイツがどのような問題をかかえていたか、どのような問題をかかえていたがゆえに、詩人になったのかを再考する必要があると思われる。一般に、文学者の仕事の本質的なものは「処女作」にすべて含まれていると言われ、主題的に見れば、イエイツの場合も、たしかに初期の詩にそう言って差し支えないものがいくらか見出されるけ

れども、彼が詩人になる前に否応なく背負っていた問題、遭遇した困難はきわめて大きく、人間としても詩人としても若くて未熟な青年にとって、それらは簡単には処理できない複合的な問題圏を作っていた。伝記的事実を調べて驚くのは、幼少年期から詩人を志す20歳前後までに、彼が生涯をかけて取り組む重要な問題の大半が、かなり強く意識され、第三者にも認知されていたことがある。そのうちのいくつかを指摘すれば、

- 両親の家系・気風の著しい違いに起因する心理的緊張、及び気質からくる「実存的不安」。
- カトリック・プロテstantの宗派の違いと、社会的地位・貧富の問題、及び既成の制度的宗教に対する疑問。
- ロンドン・ダブリン・スライゴーの間を転々とする不安定な住環境と帰属感の問題。
- アイルランド人を蔑視する英國人に対するアイルランドの独自性の強調。
- ロンドンという帝國と産業の中心である近代的都市に対して、土俗性と神話によって「生命の全体性」を培う反近代的辺境としてのスライゴーの風土。
- 父親の合理主義・主知主義の影響と、それに対する反撥。「進化論」に代表される科学思想の世界観に対する疑問と、それを乗りこえる宗教的思想の可能性の追求（神智学・スピリチュアリズムへの積極的関与）。
- アイルランドの文化的自立性と国家的独立を実現するために有効な方法。文学による〈ケルト的なもの〉あるいは〈古代アイルランド的なもの〉の復興。

イエイツの詩的生命を形成するこのような諸問題が、初期のイエイツの文学活動にどのように表れているかを、パネリスト三氏がそれぞれの立場から示し、討論の題材を提供する。

●「詩人の始まり」——此處ではない何處かへ 長谷川弘基

イエイツ自身が「決定版」とした *The Collected Poems* を見る限り、イエイツの最初期の詩は *Crossways (1889)* に収められた作品であり、その発行は *The Wanderings of Oisin* の発行と同じ年である。が、イエイツはそれ以前に *The Island of Statues* や *Mosada* を発表している。また、1880年代に書き残した未発表の詩も、今では簡単に読むことができる。イエイツ自身がこれらの作品を自らの「決定版」から外した理由は、それらが未熟な詩であったということに尽きるだろう。したがって、「詩人の始まり」の年を「1889年」とすることに異論をさしはさむ余地はないと思われる。とりわけ、いわゆる中期・後期のイエイツの詩を知る人々にとって、「1889年以前」は無きにも等しい。

しかし、たとえ単なる「のぞき趣味」と揶揄されても、また、乏しい資料に頼らざるを得ないゆえに、やはり鍵穴からイエイツの部屋を覗き見る程度しかできないとしても、もしも可能であるなら、詩人の誕生する瞬間を垣間見たいと思う。萌芽の中にも遠い未来を示す何か特徴的なものが見出せるかもしれないから。

複数の評伝が明らかにしているように、イエイツの幼年期・少年期は、ある意味において、すでに典型的にイエイツ風である。つまり、Anglo-Irish であることや、著しく性格の異なる二つの家系の間に育ったこと、また、ロンドン・ダブリンという都市とスライゴーという地方の両方を知っていること、等々に認められるように、イエイツは最初から二重性を宿命づけられていたようと思われる。そして、彼の最初期の作品群に反映されているものは、この二重性のどちらをも受け入れることができない若者の姿であり、詩人イエイツの以後の仕事は、「此處ではない何處か」を探し続

けることにあつたと考えられる。

シンポジウムを通して、イエイツの「若書き」の作品の中に、「イエイツ」の姿を求めることができればと願う。

●初期の詩を貫く象徴と場—中期・後期の詩へ向かって

奥田 良二

イエイツの初期の詩集*Crossways*や*The Rose*の中の詩、たとえば “The Song of the Happy Shepherd” や “To the Rose upon the Rood of Time” 等には、「夢」「バラ」「時間」といった言葉が繰り返し現れる。そしてこれらの言葉が発せられる背景や場が牧歌的世界から始まり、インド、アイルランドへと変化していく。イエイツの目は、理想の世界から、複雑な現実世界へと向けられ、それとともに詩人の理想と真実の探求への旅の様相も変化していく。

以上の言葉の象徴性と、探求の原点となつた牧歌的世界をイエイツがどのように彼独自の世界に仕上げようとしていたのか、また素朴な背景や舞台がより複雑な場に移行していくのは何故かといった問題を分析することにより、イエイツにおける天上界と地上の世界、牧歌的世界と現実世界の意味と相互の関係、そしてイエイツ自身の変化を探り、幼少年期から受けってきたさまざまの影響や、形成されてきた関心が、どのように初期の詩の中で表され変化し、それがどのように中期・後期の詩に繋がっているのかを考察する。

●初期イエイツに与えたウィリアム・ブレイクの影響について

— ‘The Prophetic Books’と散文を中心に

星野恵里子

イエイツは 1893 年に編纂した *The Poems of William Blake* の ‘Introduction’ で、ブレイクの生涯について、そのアイルランドにおけるルーツから説きおこし、かなり詳細な解説を試みている。なかでももっとも顕著なのは、ブレイクの気質を説明する際に ‘wrath’、‘anger’、‘enthusiasm’、‘fury’、‘passionate’、‘fierce’ といった怒りや激しさを表す表現が多用されている点である。このようなブレイクの気質の原因是、そもそも何だったのだろうか？イエイツはブレイクの怒りが、その時代と社会背景に対するものであったことを指摘している。それは ‘The Prophetic Books’ と呼ばれる後期の作品群で扱われる中心問題、すなわち ‘imagination’ に対して ‘reason’ を尊重する時代的思考であった。ブレイクにあって ‘reason’ とは ‘number’、‘weight’、‘measure’ などの語と同様に、ニュートンに代表される、当時台頭しつつあった近代科学を象徴する語であり、常に批判していた語でもある。したがって、ブレイクのこのような思考が、近代科学に対して異を唱えるイエイツの態度に影響を与えたと思われる。

イエイツはブレイク作品の転換期を、ブレイクがおよそ 26、7 歳の時であると指摘する。なぜならば、それ以降の作品のほとんどが ‘The Prophetic Books’ と呼ばれ、神秘性と象徴性を色濃くまとうことになるからである。また、それと同時に ‘Zoa’ と呼ばれる一人の人間の中に存在する四つの気質の象徴の、特にそれぞれが ‘imagination’ と ‘reason’ を担当している ‘Los’ と ‘Urizen’ の宿命的な争いというテーマを一貫して扱うことになるからである。

本論では、主に ‘The Prophetic Books’ と散文から、ブレイク思想における近代科学的 ‘reason’ に対する批判を読み解き、それがイエイツに影響を与えるに至った過程を考察する。

9月27日(日) 研究発表

● BlakeとNietzscheをつなぐもの：YeatsのJacob Boehme 受容について
伊東裕起

YeatsはNietzscheを読み始めた1902年に“Nietzsche completes Blake and has the same roots”(L,379)と書いた。しかしながら、YeatsはBlakeとNietzscheが“the same roots”を持つと見たのであろうか。この問題を論じるために、まずYeatsはBlakeをどのように受容していたかを確認する必要がある。Yeatsは1889年にEdwin EllisとBlakeについての研究を始め、1893年に三巻本を出版したが、Yeatsがこの時Blakeを読み解く上で参考にしたのがJacob Boehmeである。BoehmeはBlakeに多大な影響を与えた思想家であり、また二律背反の思想、そしてNietzsche的な「意志」の思想や「意志」の間の闘争の概念を提唱している思想家である。さらに、1896年にYeatsがアラン島に赴いた時に島民から聞いたケルトの民話にはBoehmeの「鏡」の考え方と極めて似たものがあり、彼はこのことについて“The High Crosses of Ireland”やThe Speckled Birdの中でも大きく扱っていることも指摘すべきだろう。

さて、Yeatsが“Nietzsche completes Blake and has the same roots”と書いた時、その“the same roots”とは何だったのか。私はBlakeとNietzscheをつなぐものとしてJacob Boehmeの存在を示唆したい。これによって、Yeatsのツアラトウストラ劇*Where There Is Nothing*を*The Unicorn from the Stars*に書き換える際、なぜ主人公をBoehme的幻視家に変えたのか、その理由の説明ができる。YeatsのJacob Boehme受容に目を向けることによって、YeatsのBlakeとNietzsche受容もより深く語ることができると考えよう。

●「土掘りとしての詩」再考
河田優子

シェイマス・ヒーニーの詩作品が、私たちを惹きつけてやまないものに「土掘り」のモチーフがある。しかし、「土掘り」のモチーフはあまりにも魅力的であるがゆえに、すでに語りつくされてしまった印象がある。しかし、本当に語りつくされてしまったのだろうか。例えば、「土掘り」そのものを描いた詩“Diggings”に繰り返される“digging”という語を改めて分析してみると、「土掘り」を眼前に浮かび上がらせる効果だけでなく、この語の中に「家族“ging”」(OED 2)が含まれていることに気づく。まさに、詩人が「家族を掘り起こし“dig-ging”」していくさま、連綿と続く一族の伝統を明るみにしていく様子がこの一語で表わされているといってよいだろう。このように、私たちを惹きつけてやまない「土掘り」のモチーフには、まだ発掘されていない（発掘しきれていない）鋤の跡があるのでないだろうか。

本発表では、*District and Circle*(2006)までを含め、bog poemsを中心にヒーニーの詩をもう一度掘り返すことで、「土掘り」のモチーフの新しく豊かなイメージを発見し再確認することを目的とする。

● *The Dreaming of the Bones*の表象構造について
佐藤容子

*The Dreaming of the Bones*はイエイツが能をモデルとして書いた舞踏劇の一つである。モデルとしての能は、詩、演劇、歴史、政治に対するイエイツの様々な関心を結び合わせていく触媒としての役割を果たしたと言える。

The Dreaming of the Bones は、「現在」が「過去」と出会う危機的時間を劇化しているという意味で、イエイツの他の舞踏劇とは様相を異にしている。この劇では、1916 年の復活祭蜂起の現場から逃れてきた若い兵士が、Diarmuid と Dervorgilla の亡靈と出会うことになる。劇の様式的な枠組みは *At the Hawk's Well* と共通しているが、邂逅の場は現実のアイルランドに設定されており、若者は、亡靈の懇願と誘惑に抗い、他国によるアイルランド支配の元になったと考える二人を許すことができない。若者のこのような道義的判断あるいは政治的選択によって、二人連れの幻影は視界から消えてしまう。劇の結末は両義的である。

本発表においては、イエイツの夢幻劇 *The Dreaming of the Bones* の表象構造を、日本の能との関わり、アイルランドのフォークロアまた歴史との関わり、そしてサウンド・シンボリズムの技巧という複数のパースペクティブから考察する。これは、私がこれまでに同様の観点から行ってきたイエイツ劇の一連の分析に連なるものである。本発表では、サウンド・シンボリズムに関しては、イエイツの体系のなかで一義的には対立関係にあると考えられる /f/ 音と /b/ 音の二つが基本軸となる頭韻の技巧が、融合への律動を喚起する /d/ 音や、両義的に揺れ動く /w/ 音、/g/ 音の連鎖によってさらに複雑に支えられつつ、心の深奥の複雑な文様を書き出していることを明らかにしたい。この劇作のタイトルそれ自体に、/b/ 音、そして /d/ 音が含まれていることの意義についても論じたい。

9月27日（日） ワークショップ

「“The Seeker”を中心に—イエイツ初期詩劇に見る萌芽と可能性」

司会・構成：伊達恵理

発題者：小菅奎申 虎岩正純

●はじめに 伊達恵理

劇詩 “The Seeker” (1985) は、Yeats の詩人としてのキャリアのごく初期に書かれた小品で、definitive edition には収められなかった数編の劇詩のひとつである。アイルランドという主題を見いだす以前の Yeats が大きな影響を受けていた「Shelley や Spenser の文体を牧歌劇の形に融合させようとした」作品でもあるが、短いながら後の彼の作品にも受け継がれてゆくことになる要素—詩作に対する Yeats の探求者の態度、象徴的手法、ファム・ファタルに魅せられた果ての老いと破滅、運命の皮肉などが、まだ明確な形を取らぬまでも、豊富にしかも緊密に盛り込まれている。

Katharine Tynan への手紙などからも、これら初期の劇詩は舞台劇としての上演を想定しつつ書かれたことがうかがわれる。また若き Yeats には劇詩という形式と、朗唱へのこだわりがあった。ならば詩人としての出発点で Yeats が思い描いた “The Seeker” の作品世界が、実際に役者の声や動きを伴って表現された時いかなるものとなり得るかを検証すること、そしてそこに、*At the Hawk's Well*などの、将来の詩劇に通じる萌芽と可能性を探り、あるいは後年の作との相違を比較考察することの意義は大きい。

ワークショップでは、“The Seeker” の演劇及び朗読による上演の可能性を探り、各パネリストがそれぞれの作品解釈と、それに基づく上演を行う。伊達はコーディネーターとして上記のような作品成立の背景および作品の位置づけを解説し、その後、特に放浪の騎士を探求に駆り立てた魔女の美しい「声」とその醜悪な姿の乖離という点に焦点を当てて、後期の能の手法を取り入れた象徴的舞台に近い上演の可能性を探りたい。

●未だドラマたり得ず？—Yeats の *The Seeker*について— 小菅 奎申

本作品『尋ね歩く者』は、「2場構成による劇詩」と銘打たれた81行から成るテクストである。私はこれを先ず日本語に置き換えて朗読してみたい。日本語で行われている学会である以上、日本語に翻訳する理由や言い訳など無用のはずである。私自身、日本語を母語としているので、そのほうが朗読しやすい。朗読のあと、少々考察らしきことを述べる。

私は、この一文を書いている段階（7月18 - 22日）では、このテクストを詩として読んでいるだけで、そこにドラマを認めることができない。問題はその理由で、これがなかなか明確な言葉にならないのだ。基本的には、展開に必然性が感じられないということに尽きるのだが、細部の不整合や恣意性（と思えるもの）に悩まされて理解に手間どり、内容のあるレジュメが書けないでいる。大会までにはなんとかしたい。

このテクストの解釈がイエイツ研究の一端として意味があるということと、これが、「劇詩」と銘打ってはいるものの、戯曲の形式をとっているだけで、実はドラマが不在なのではないかという主張とは矛盾なく並立するはずである。

●舞台を夢見るテクスト 虎岩 正純

このワークショップでの私の提案は、Dramatic Poem in Two Scenes という副題が示すように、作者の舞台上演の願望を汲んで、上演するとどうなるか、何が見えてくるか、を検証することである。この作品は天才イエイツのものとはいえ、20歳のまだ成長期の青年の作品で、完璧な完成品とはとても言えない。しかし、未完成ながら、後の作品に現れる様々な方法やモチーフ、コンセプトを既に、この作品に読み取ることができる。たとえば、生と死、老人、エロスと挫折、放浪、夜と昼などは、一読して見えてくるこの作品のモチーフの数々であるが、生涯これらのモチーフから離ることはなかった。

詩は散文とは違って、言葉をそこに提示するものだ、といったバーシックな議論はさておき、イエイツの作品は詩作品でありながら、さらに直接的な具体物の再現性を詩の方法論としてもっているようと思われる。それは演劇的あるいは舞台的と呼ぶほかない具体的な再現性である。聴覚的だけではなく、視覚的な再現が読者に要請され、具体的な声の集合体に触れることになる。舞台という具体的な空間に、俳優という具体的な肉体がのり、俳優の声という具体的な響きがのり、目に見える書割りが新しい空間を作りだすように、イエイツの詩の世界は演劇空間を目指している。

私の仕事は、*The Seeker*に現れる様々なコンセプトを分析しながら、台本片手に、いささか上演には制約の多い教室で Reading Theatre をすることである。作品の不可分の要素としてイエイツが書いた「卜書」を持っているのであるから、できるだけ「卜書」に忠実に（ただちに自然主義やリアリズムを意味しない）再現し、足りないものは想像力で補いながら、本邦初の、いや世界初の上演をなしとげたい。作品の分析解釈においては、後期の作品にあるものだから前期の作品にもあるはずだという anachronism だけは避けたいと思っている。お客様方の積極的なご参加、ご協力を伏してお願いいたします。

MEMO